

心つなぐ桜がある

町のどこかに、あなたの胸に。



春

鮮やかに変身する桜。ほんのりを差したように、町の随所が明るくなります。

ふだんは目立たない桜が、内に秘めた美しさを花に現したとき、人は心動かされます。それは、桜が生命力を凝縮し、全身全霊で咲き誇るからなのかもしれません。しかも開花は、ほんのわずかな期間だけ。そよ風に可憐な花を揺らし、春の風に抗いもせず舞い、散っていきます。

例えば、桜の草木染めは花びらを使うのではなく、枝や幹で染めるのだそうです。花が咲く前、桜全体の力が宿っているときの枝木で染めると、きれいな色が出るのだとか。いかに、桜という木が命を燃やし、花を咲かせるかが理解できます。

第二章 一本桜の物語



つぼみのころ、満開、散り際など、一本の桜の木でも見る時間や角度によって表情もさまざま。桜の花はほかないけれど、でもまた毎年、必ず命を燃やして咲いてくれる。そういう木に宿る限りない力が、わたしたちの心に響いてくるのかもしれません。

子どもたちの友情咲かす琉球寒緋桜

ヤマザクラ、ソメイヨシノ、シダレザクラ、エドヒガンなど、この町に咲く桜に今年、新しい桜が加わりました。琉球寒緋桜です。子どもたちが互いに訪問し、視野を広げ、友情を深めている沖縄県中城村から、二月二日に小学校五・六年生の十二人が来町。初めて触れる雪に歓声を上げた翌日の二月三日、この交流を記念して下田川ライオンズクラブ（新免

日本の代表的な花として定着している桜。今も昔も広く親しまれ、町内にも数え切れないほどの桜が植えられています。いつの時代もその時の感情や情景が、桜の美しさとともに、記憶として、それぞれの心に刻まれてきました。そして今年もまた、新しい桜の印象が、一人ひとりの胸につづられていくことでしょう。

真人会長 から一本の琉球寒緋桜が贈られました。今春から赤池支所の女関脇に植樹された友情の証しは、沖縄から北上する桜前線とともに、鮮やかな花で季節の到来を告げ、子どもたちの思い出に彩りを添えていきます。「城」のつく名前が縁で旧方城町から交流し、十四年目を数える今年、心つなぐ桜が福智山と向かい合うようにして寒風に揺れていました。



↑植樹した桜(中央)を囲んで。ホームステイした中城村の子どもたちと、歓迎した福智町の5・6年生22人。
 ※釣り鐘のように咲く琉球寒緋桜は、濃い色で大ぶりの花が特徴。沖縄では1月末から見ごろになるという。

数千の杉に囲まれた空間、枝を広げ、その桜は立っていた。推定樹齢六百年、県内最大のエドヒガン「虎尾桜」。かつて、福智山の霊木としてあがめられた。やがて時代に忘れ去られ、人知れず散り、朽ち果てようとしていた――

朝霧に浮かぶ虎尾桜